助産学科　３つのポリシー

ディプロマ・ポリシー（卒業の認定に関する方針）

教育理念に基づき本学科の教育課程を修め、所定の単位を取得し、以下の能力を身につけることを卒業の要件とする。

１．次世代育成を支える助産師の役割を遂行するために、対象の権利や価値を尊重し、専門職者として倫理的に対応できる能力を有する。

２．ウィメンズヘルスケアにおいて、女性の生涯の健康に関する課題に対し、包括的・継続的・多様な視点から支援する能力を有する。

３．マタニティサイクルにおいて、対象の健康状態を診断し、健やかで安全な経過がたどれるよう根拠に基づいた支援ができる能力を有する。

４．対象の持てる力を信じ、主体的な課題解決を実現するために、対象とよりよい関係性を築き、エンパワーにつなげるためのコミュニケーション能力を有する。

５．生活の視点に立ち、母子が安心して暮らせるためのしくみや制度を理解したうえで社会資源の活用や調整を行う管理的能力を有する。

6. 対象を支えるチームの一員としての責任を認識し、他職種を理解し、連携、協働するための能力を有する。

カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成に関する方針）

１．基礎助産学科目群は助産師としての資質を身につけ、ウィメンズヘルスケアを支える上で基礎となる授業科目で構成する。また、専門職としての役割の理解や、多職種と連携する能力を身につけるための演習科目を含む。

助産学概論／生命倫理／家族社会学／女性の心理学／女性の健康科学
専門職連携演習／助産研究（文献講読）

2．助産診断・技術学科目群では、マタニティケアを行う上で必須となる知識・技術およびコミュニケーションやヘルスプロモーションにかかる能力を修得するための科目で構成する。また、マタニティケアを通して対象者の力を見極め、引き出し、乗り越えるためのかかわりを中心に、さまざまな状況にある対象をエンパワーできる助産実践を行う上でのコミュニケーション力を向上させる内容とした。

助産診断・技術学Ⅰ妊娠期～助産診断・技術学Ⅴ新生児期においては、前半は健康状態を診断するためのアセスメント過程に重点をおき、正常を判断する視点と、安全で円滑な経過を支援する能力を養う。また実践の中核となる助産技術の修得（助産診断・技術学Ⅲ分娩期の助産技術）においては原理原則を学んだ後に、段階的に学内での演習を行い、個々の修得状況を確認した上で、臨地実習へとつなぎ、確実な修得を目指す。さらに多様化し増加しつつあるハイリスクおよび異常については独立した科目を設定し、臨床判断能力をもちいて緊急時に対応するための知識・技術を修得する内容とした。

さらに、助産師として必要な、関係構築の技術については「助産師のコミュニケーション」として設定し、演習を通して自己理解・他者理解を深め、コミュニケーションスキルを用いて対象をエンパワーするための視点や技術について学ぶ。また助産師として求められるカウンセリング技術についてもこの科目で学修する。「母乳育児支援」においては、科学的根拠に基づき母乳栄養の利点を理解した上で母乳育児を確立するためのエモーショナルサポートを実践するための姿勢や技術について集中的に学ぶセミナーを実施する。そして「健康教育の技術」では、ウィメンズヘルスケアにおいて重要な位置づけにあるヘルスプロモーションを実現するための教育について理論を学ぶと共に、企画運営の一連の過程を実践する。

助産診断・技術学Ⅰ／妊娠期／助産診断・技術学Ⅱ／分娩期
助産診断・技術学Ⅲ／分娩期の助産技術／助産診断・技術学Ⅳ／産褥期
助産診断・技術学Ⅴ／新生児期／助産診断・技術学Ⅵ／ハイリスクと異常
助産過程／助産師のコミュニケーション／母乳育児支援／健康教育の技術

3．地域母子保健では、母子を中心とする家族から地域・社会へ視野を広げ、地域における助産師の役割やさまざまな職種との連携を学ぶ。また子育て期にある対象に焦点を当て、生後４か月の乳幼児のアセスメント、産後の女性のメンタルヘルスケアについて理解を深める内容とする。

4．助産管理では、管理的な視点で助産所の運営の基本、周産期医療システムについて学ぶ内容とする。また、周産期における医療安全の確保と医療事故への対応、災害時の助産師の役割について学ぶ内容とする。

5．助産研究（文献講読）では助産師としての業務の質を高めるために助産研究の意義と文献活用の方法について学習する。

6．助産学実習

【助産診断・技術学実習】一例を大切にし、省察をとおして段階的に思考・判断・実践力を向上させる。前半は正常について五感を通して学び、基本的な対応や、技術を学修する期間とする。中盤に学内での講義期間を設け、前半の実習で得た個々の課題を明らかにした上で、後半の実習に臨む。後半の実習では、学生自身が主体性を意識し、自ら判断し、個別的な状況にも対応できる助産実践が行えることを目指す。また、継続事例として実習初期に妊婦を受け持ち、分娩を経て産後１か月まで関わり、対象の生理的変化や継続して行われる助産活動の意義と方法を学ぶ。

【地域母子保健実習】地域で暮らす母子について学び、家庭訪問の実施などを行う。対象が生活する場や社会資源の活用を実際に知ること、産後４か月程度の母子にかかわる機会を設け、子育て期に対する視野の広がりを目指す。また産後のメンタルケアについても学べる実習内容とした。

【助産管理実習】助産業務の管理や助産所の運営、周産期医療システムなど助産活動を多角的な視点から学べるよう、先進的な医療を提供する産科病棟、ＮＩＣＵ，助産所などでの実習を行う。

アドミッション・ポリシー（求める人物像）

１．助産師として、保健・医療・福祉に貢献する意志を明確に持っている人

２．看護学における基本的知識を有し、自ら考え判断し、主体性を持って他者と協働して学ぶ姿勢を有する人

３．　助産師を目指す高い志を有し、自律した学びができる人

４．人としての成長を目指しつつ、他者を尊重し、信頼関係を築くための努力ができる人